

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：34205

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23500762

研究課題名(和文)女性の積極的スポーツ行動を促す調整力・交渉力の検討

研究課題名(英文) A research of adjustment capabilities and negotiation capabilities that encourage a positive behavior of woman sports

研究代表者

佐藤 馨 (Sato, Kei)

びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・准教授

研究者番号：50326592

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：レジャー志向の違いから潜在的なスポーツ実施者を探索することを目的とした。20～70歳の男女1128名を対象、郵送法による調査を実施。

因子分析の結果、第1因子「長期展望・向上因子」、第2因子「外出・対人関係志向因子」、第3因子「身体活動因子」、第4因子「利他主義因子」、第5因子「主導性因子」をとした。因子得点を性別、年代別、職業形態別で比べた結果、身体活動因子は女性、20代、パートタイマーが有意に低い。女性や20代は外出・対人関係志向因子が高く、友人と外出を伴うスポーツの提案が有効。スポーツを実施する調整力は女性の得点が低く、男性よりも自助努力や費用・時間等を捻出する家庭や社会との調整が重要。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the present study is to identify the potential sport participants, those who are currently inactive, based on their leisure orientations. 1128 participants from 20 to 70 years were recruited by the mail survey method.

After conducting exploratory factor analysis, five factors were determined to account for the most variance explained: 1) long term perspective/ personal growth, 2) Sociableness, 3) Vigorousness, 4) Altruism, and 5) Leadership. The significance of each factor was further compared based on participants' demographic factors. The result showed that Vigorousness is significantly lower in the group of people who are females, in their twenties and part-time workers than other groups. Meanwhile, female and people in their twenties found to be more social stimulation oriented. Therefore, in order to encourage physical activities for the demographic group, recommending the sports which is associated with social elements will be effective.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 スポーツ社会学

キーワード：スポーツ 調整力 交渉力 ジェンダー 社会心理

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、スポーツ活動を積極的に実施している女性に焦点を当てた研究において、物理的制約のある既婚女性よりも心理的制約のある既婚女性の方がスポーツ活動を断念せざる負えない状況にあることを明らかにした(佐藤, 1995; 1996)。研究代表者はさらにその心理的制約をさらに検討するため、女性の余暇に対する意識や考え方(余暇志向性)さらに生活全般の捉え方といった観点から、平成19年度から2年間、科学研究費補助金基盤研究(C)【課題番号: 19500550】において「主婦のスポーツ活動促進モデルの検討」と称した調査研究を行ってきた。この研究では、女性のスポーツ活動を促進する要因探索のため、余暇に対する志向性とスポーツ活動との関連を検討した(佐藤, 2009; 2010)。

結果として余暇に対する志向性にはいくつかのタイプが見られ、余暇全般に積極的な態度を示す「最適型」、即時的な楽しみや快楽を追及する「自己中心・現在志向型」、現時点では余暇に積極的ではないが潜在的に余暇への関心を示す「平準型」、余暇活動は自己を向上させるチャンスと捉えている「自己啓発型」、そして余暇全般に全く興味を示さない「消極型」の5つに分類されることが分かった。これらグループとスポーツ活動状況を検討したところ、スポーツ活動頻度が高い傾向を示したのは、最適型や自己中心・現在志向に分類される女性であり、スポーツ活動頻度が低い傾向を示したのは、消極型や自己啓発型に分類される女性であった。一方、平準型に属する女性は、スポーツ活動頻度は少ないものの、先述の潜在的な余暇志向やスポーツへの関心を示しており、このことから効果的なスポーツの働きかけは平準型の女性にこそ必要であると判断した。さらに平準型への積極的なアプローチが必要な理由として職業形態との関連があげられ、平準型では専業主婦が有意に多かった。すなわち家事や育児に専従する専

業主婦は、それだけで外界や他者との接触頻度が少なくなることは想像に難くない。したがって、スポーツを手段として外界や他者とのコミュニケーションを図ることが彼女らの精神的安定を確保し、より充実した余暇生活を可能にすると考えからである。

またスポーツ活動頻度の低い消極型や自己啓発型に関しては、スポーツに無関心なグループであることを踏まえ、今後この層に属する女性のスポーツへの行動変容と活動率の改善に取り組むことも重要である。しかしながら先の研究(佐藤, 2009; 2010)では、スポーツに消極的な女性に向けたスポーツ行動モデルの具体的提案に至らなかったため、これまでとは異なったアプローチが必要と考えた。そこで新たな視点として、Constraint Negotiation (Julie, Deborah & Andrew, 2008; Daniel, Brent & Erica; 2007)の概念を用いることとした。これは個人の余暇活動を実現する際、それを制約する要因、すなわち問題に対して環境や社会を調整したり(「調整力」)場合によって他者や家族と交渉したり(「交渉力」)しながら、自己の余暇確保のためにどれだけ有益な行動が取れるのかというものである。

以上のことから、女性のスポーツ活動を社会や家庭内における調整力や交渉力との関連から明らかにすることにより、女性のスポーツ行動を変容させ、それを後押しする手がかりになると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、余暇に対する意識・考え方(志向)の観点から女性を区別し、Constraint Negotiation 概念を用いて余暇実現のための社会的調整力や交渉力を評価し、それとスポーツ活動との関連を検討することを目的とする。このことが、これまで女性のスポーツ活動において阻害要因としてあげられてきた家事・育児による時間の制約という結論から一

歩前進し、さらに将来的にすべての女性のスポーツ実施率を押し上げることに繋がると考えたからである。

### 3. 研究の方法

調査対象は滋賀県栗東市に在住する 20～70 歳の男女 4,000 名とし、サンプリングは栗東市教育委員会文化体育振興課の協力により、住基ネットを用いて抽出した。調査期間は、2013 年 3 月 15 日から同年 4 月 15 日に渡った。調査方法は郵送法により、調査票の配布および回収を行なった。回収率 28.2% (1,129 部)のうち、有効回答は 28.0% (1,123 部)であった。

### 4. 研究成果

28 項目からなる余暇志向性尺度を用いてその因子構造を検討するため、個々の余暇に対する意識や行動を表わした 2 つの対比文章 (A 文章、B 文章) を回答者に提示した、回答者は、自分の考え方や行動に照らして「A 文章に賛成 (4 点)」「どちらかと言えば A に賛成 (3 点)」「どちらかと言えば B に賛成 (2 点)」「B に賛成 (1 点)」の 4 段階で回答する。なお、28 項目中には逆転項目がいくつかあり、それらはすべて逆転した得点に変換した上で分析を行なった。

余暇志向尺度を構成する 28 項目の因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行なった結果、5 因子を抽出した。第 1 因子は、「目標に向かって自分を向上させたい」「余暇に新しく学ぶことをしたい」「趣味には、資格取得や技術向上を視野に入れるのがよい」「技術、経験などが必要な奥深い活動が好き」など、あわせて 8 項目の負荷量が高く、余暇活動であっても自己を高めようとする姿勢が伺えるため「長期展望・向上因子」とした。第 2 因子は、「余暇時間は友人と過ごしたい」「自分の趣味は他の人とするものが多い」「余暇時間には出かけたい」「ドライブや旅行に出かける

のが楽しい」など、あわせて 8 項目の負荷量が高く、余暇活動において他者との関係性を重視している様子と、外出を好み、体験を重視している様子が伺えるため「外出・対人関係志向因子」とした。第 3 因子は、「体を動かす方がリフレッシュする」「余暇時間には体を動かしたい」「スポーツ・フィットネスに努めている」など、あわせて 4 項目の負荷量が高く、余暇活動において身体を動かすことに積極的であると解釈し、「身体活動因子」とした。第 4 因子は、「自分の時間を利用して、社会や人の役に立ちたい」「ボランティア活動や社会貢献できる活動に関わりたい」など、あわせて 4 項目の負荷量が高く、他者への奉仕意欲が高いことが分かったため、「利他主義因子」とした。第 5 因子は、「計画する時、自分が中心になって進める役だ」「自分が中心になって計画するのが好き」など、あわせて 4 項目の負荷量が高く、すべての項目において余暇活動の場面で中心的役割を担っていることから「主導性因子」とした。因子を構成する項目から合計得点を算出し、その平均値を各因子得点とした。

因子得点を性別から見ると、身体活動因子得点 ( $t=2.75, p<.01$ ) および主導性因子得点 ( $t=4.43, p<.001$ ) は女性が有意に低く、外出・対人関係因子得点は、女性が有意に高かった ( $t=3.20, p<.001$ )。スポーツ活動を促進することを考えるならば、女性の場合、友人と連れだつて行なうスポーツの提案は有効であると考えられる。因子得点を年代別で見ると、20 代の若年層は身体活動因子得点 ( $F=2.59, p<.05$ ) が有意に低く、外出・対人関係因子得点 ( $F=6.33, p<.001$ ) が有意に高い傾向にあった。一方、高齢者はその反対の傾向を示した。また 30、40 代の中年層は、利他主義因子得点 ( $F=15.96, p<.001$ ) が有意に高い傾向あり、このことから若年層には、女性同様、友人を伴ったスポーツの提案、中年層には、ボランティア等の活動を含んだスポー

ツの提案が有効であると思われる。

因子得点を職業形態別にみると、身体活動因子得点 ( $F=4.27, p<.01$ ) がパートタイム・アルバイトにおいて有意に低く、それは専業主婦のそれよりも低い。一方、会社員・職員についてはその得点は有意に高いことが分かった。主導性因子得点 ( $F=6.76, p<.001$ ) は、専業主婦が有意に低く、自営業において有意に高いことが分かった。パートタイム・アルバイトについては、仕事と家庭の役割 (以下、主婦業) をこなす立場にある人が多いと推測されるため、物理的な時間の確保が何よりも重要と思われる。あえて時間の確保が難しいと考えられるパート・アルバイトについては、短時間に効率よく実施できるスポーツの提案が有効だと思われる。

「スポーツ観戦に出かける」「健康のためのスポーツ」「楽しみのためのスポーツ」「競技のためのスポーツ」「アウト・ドラスポーツ」の各項目について、「しない(1点)」「年数回(2点)」「月1,2回(3点)」「週1,2回(4点)」「週3回以上(5点)」で得点化し、さらに「スポーツ活動得点」として平均値を求めた。結果として、女性のスポーツ活動得点が有意に低く ( $t=5.28, p<.001$ ) パート・アルバイトのそれが有意に低いことが分かった ( $F=5.41, p<.001$ )。パート・アルバイトを行っている女性は、特にスポーツ活動から遠い場所に位置していると考えられる。すなわち、効率よく実施できるスポーツであると同時に、そうした経験を共有できる友人と一緒に実施することが効果的だと考える。

次に、余暇においてスポーツを実施するためには、家族や友人を含め周囲との調整や交渉等は必要である。そうした社会における調整力や交渉力を検討するため、「調整力、交渉力尺度(15項目)」の因子分析を行なった(主因子法、プロマックス回転)。回答は「非常にある(5点)」「ある(4点)」「どちらともいえない(3点)」「ない(2点)」「全くない(1点)」

の4段階で求めた。その結果、第1因子は、「スポーツ・余暇活動の時間を確保しようとしている」「自分にはスポーツや余暇活動をする余裕がある」「スポーツ・余暇活動のための時間を確保している」など、6項目の負荷量が高く、余暇においてスポーツを実施するために必要な家族や社会との調整をおこなう「調整力因子」とした。第2因子は、「一生懸命努力している」「自分の力不足を受入れ、最善を尽くそうとしている」「自分ができることに最善を尽くしている」など、5項目の負荷量が高く、余暇においてスポーツをするため自ら努力する態度や姿勢をあらわした「自助努力因子」とした。第3因子は、「近所や職場にスポーツや余暇活動をする友人がいる」「休日が比較のおなじ友人がいる」「スポーツや余暇活動をするために家族や友人に説明している」など、3項目の負荷量が高く、余暇においてスポーツを実施するため周囲への説明や説得等の交渉を行なう「交渉力因子」とした。第4因子は、「家族に対する責任感を果たしている」「この項目において負荷量が高かったため、余暇においてスポーツを実施するために家庭や社会における自分の責任を果たしている」「責任感因子」とした。以上の因子を構成する項目から得点を算出し、その平均値を因子得点とした。

因子得点を性別で見ると、調整力因子 ( $t=5.11, p<.001$ ) および自助努力因子 ( $t=4.62, p<.001$ ) において女性の得点が有意に低かった。このことから、余暇において女性がスポーツを実施するためには、男性以上にスポーツ活動を実現するための自助努力や費用・時間等を捻出するための家族や社会との調整が必要であることが分かった。本研究では明らかに出来なかったが、上述のような女性の自助努力や調整力を引き出すための社会的エンパワメントも併せて必要だと思われる。

さらに因子得点を職業形態別に見ると、調整力因子 ( $F=4.40, p<.001$ )、責任感因子

( $F=2.56, p<.05$ ) において有意な差が見られた。調整力因子においては、専業主婦やパート・アルバイトの得点が会社員と比較して有意に低く、主婦業がいかに家族や社会との調整を難しくしているのかを如実に表わした結果と言えよう。また責任感因子は、専業主婦やパート・アルバイトの得点が学生と比較して有意に高かった。これは家族や社会との関係が緩やかでそれへの責任が少ない学生に比べ、主婦業は家族や社会との関係が密接であることを改めて示したと言える。

以上の結果から、女性の積極的なスポーツ実施を促すためには、以下の点が必要となる。

女性は、友人との外出を好む傾向があり、また専業主婦等は、主体的な行動を好まないことから、友人知人を介した勧誘型のスポーツの提案が有効だと思われる。

パート・アルバイトについての女性については、上述に加え、さらに時間的制約が問題となる。従って、短時間で、どこでも誰とでもできるような簡便なスポーツの提案が必要であろう。

女性の場合、余暇においてスポーツを実施するためには、家庭や社会との調整力が重要であった。しかしながら、多くの既婚女性が担う主婦業は、そうした調整力を男性よりも難しくしていることが分かった。

女性のスポーツ実施を促進するために必要なことは、女性自身が家庭や社会を調整し、スポーツ実施のスペース(時間や費用等)を確保しようとする態度や姿勢が重要である。その上で女性がスポーツ実施に調整力を発揮できるような社会的機運、すなわち社会における「女性のスポーツ実施へのエンパワメント」が極めて重要な鍵となるであろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 0 件)

[学会発表](計 2 件)

Kei Sato, Investigation of Leisure Behavioral Characteristics through the Leisure Orientation Tendency(2), XII World Leisure Congress, Italy Rimini, 2012 Sep  
佐藤 馨, レジャー志向とスポーツ行動に関する研究 レジャー意識の違いによる潜在的スポーツ実施者の探索、滋賀県体育学会第143回大会, 京都大学, 2014年3月

[図書](計 2 件)

佐藤 馨, レジャー志向とスポーツ行動に関する研究 レジャー意識の違いによる潜在的スポーツ実施者の探索 体育の科学, 杏林書院, 2014 印刷中  
栗東市教育委員会, 栗東市スポーツ推進計画, 栗東市教育委員会, 2014, 33

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

栗東市スポーツ推進計画(栗東市HP)

<http://www.city.ritto.shiga.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/52/sportskeika ku.pdf>

栗東市民余暇活動調査（栗東市 HP）

<http://www.city.ritto.shiga.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/52/yokakatudou tyousa.pdf>

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

佐藤 馨 ( SATO, Kei )

びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・准教授

研究者番号：5 0 3 2 6 5 9 2

### (2)研究分担者

なし ( )

研究者番号：

### (3)連携研究者

なし ( )

研究者番号：